

アイシン子会社

脱炭素バイオ炭

25年度にも実用化

アイシン子会社のアイシン高丘（愛知県豊田市）は28日、自社開発した植物由来の燃料「バイオ炭」を2025年度にも実用化すると発表した。鉄の溶解炉で使うことを想定しており、同社が年間に排出する二酸

化炭素（ CO_2 ）を大幅に減らせるといふ。

同社は石炭由来の燃料で溶かした鉄を固め、自動車のエンジンやブレーキ周りの製造部品を生産している。鉄は約1500度の高温で溶かすため CO_2 が大量に排出され、22年度の同社の CO_2 排出量（21万ト）のうち10万トを鉄の溶解工程が占めた。

開発中のバイオ炭は、油

分を多く含むアブラヤシの種の殻を炭化して成型したもの。燃料に使うとヤシの生育過程で吸収する CO_2 が、鉄を溶かす過程で出る CO_2 を相殺し、排出量を実質ゼロにできる。

7月に行った実証実験では、石炭由来の燃料の50%をバイオ炭に置き換えて溶解炉を6時間動かしたところ、量産品並みの品質の部品を生産できたといふ。

今後は操業時間を長くしても品質に問題がないかを確かめ、30年度までに使用する全ての燃料をバイオ炭に置き換えることを目指す。他の製造品メーカーへの外販も計画しており、内田信隆社長は「自社だけでなく、中小企業が多い铸造品業界の脱炭素にも貢献したい」と話している。